

# 【ねがいましては】

第89号

平成8年10月24日

共和珠算学習塾

「受け入れる」

就学前、子どもたちの脳裏に真っ先に浮かぶ存在、おかあさん。ひとりぼっちになった瞬間から、「おかあさん、さみしいよ、そばにいてよ・・・。」しかし小学校へ通うようになり個人差はありますが徐々に薄らいでいきます。大人への緩やかな坂道です。そして中学・高校へと歩みを進めるに従い彼らには悩みや苦しみの数々が少なからず押し寄せます。その時、やはりまず初めに相談しようと思う存在はお母さんかもしれません。その際のお母さんの対応ははたしてどのようにされるのか。

内容によってかなり難しい選択を余儀なく迫られることになりそうです。子ども自身も幼少の頃の気軽に何でも話せる内容から、かなり自分自身で悩んだ挙句の内容へと変化してきていますので、簡単には背中では聞いていればよいというわけにもいかなくなります。

「話を聞く」だけで終わるのではなく「話し合う」というかたちへと変化していくのかもしれませんが。子の気持ちをしっかりと受け止めてあげること。今後について母の意見を提示すること。子の考えも十分に考慮すること。まだまだ社会に対しての認識が不十分な時期でもあるのでひょっとすると極端な考えもしているかもしれません。

何より大切なことは、母の「落ち着き」かもしれません。子にとって母は大木のような存在かもしれません。子のところが揺らいでいる時に、母もそれに合わせるように動揺しては子の不安は益々増幅することが考えられます。つねに事を客観的に見つめることが大切なのかもしれません。

わかってはいるのだけれど、それが難しい……。 (母だって忙しいし、子同様に悩みも抱えている)

で、解決策です。それは日常の中に隠されているかもしれません。いつもとなりで風が吹いているように身近な存在として居てあげること。何でも気軽に話すことができる。つまり友達気分です。その中にも礼儀あります。子が親を敬うことは至極当然のこと。親も常に子の良いところをとりあげ、もっとその部分が膨らんでいくように接してあげる。結構「あたりまえ」的關係になってしまいがちなことに母は十分な気くばりをするのが大切かもしれません。それも気苦労にまで発展することなくです。むずかしいですね。

その一歩が「謝る」。子どもって結構「あやまる」ことに大きなハードルをかかえます。人は誰でも過ちはするもの、そのつもりでなかったにもかかわらず、つい迷惑をかけてしまったとき、悪いとわかっていて悪いことをしたわけでもないのに謝ることに、子どもは結構抵抗感を持ちます。そこを先頭を切っておかあさんが頭(こうべ)を下げる。低姿勢、謙虚、いろいろ当てはまるのでしょうか、子にとってお母さんの行動は小さい頃から「お手本」です。いつも当たり前のようにそのお手本を見ている子は、心のハードルがグッと下がり、心の中身を発しやすくなるかもしれません。

学校生活においても子どもたちの反応の在り方は様々です。「あっ、ごめんなさい」と、気軽に声を出すことができること、謝るなんて絶対にできないと、結構意地を張ってしまう子の2色が確認できたりします。なんでだろう。ひょっとしたら「おかあさん」にその源があるかもしれません。話しかけやすいおかあさん、結構スタートで勇気が必要となるおかあさん。

子の成長にとって、やっぱりお母さんの存在は大きいかもです。